

今月の谷口雅春先生のお言葉

家庭を天国たらしめるために

食物は神からきた賜物である

私たちの頂く食物は唯の物質の塊ではないのであります。物質的成分は分析したら分ります。けれども分析してもわからないところの不可知的成分が(靈的成分が)それには、神から与えられているのであつて、単に物質的成分の見地から、此の食物には何々の栄養分が足らぬからなどと考えて不平の心を起すときには、その靈的成分を吸収し得ずして、最も人間にとって必要な成分を逃がしてしまふことになるのであります。お食事の最

中に心配や不安や憎みや恐怖心を起さないで、なるべく

食物が神から来た賜物であり、無限の生かす力がこの中に蔵されているので、今それを吸収させて頂いているのであり、ありがとうございますと念じながらいただくのがよいのです。問題があつて、心が落著かなければ食前に心が落著くまで祈つてからお喫りなさい。

(新装新版『真理』第9巻142頁)

食卓が不快な場になつてはならない

私の知っている或る家庭地獄では、事務所から良人が

帰って来て、家族打ち揃って晚餐の食卓に向うとき、そこが小言の審問所になるのである。良人は事務所の色々な多忙な世間的な心遣いで神経が疲れていて、ちよつとしたことにもイライラしたくなっている。予想に反したお菜が食膳に並んでいると、最初は何の気もなくそれを不味いと小言を言う「何故こんなお菜をこしらえた？」と言って咎める。この時、細君は細君で折角の心尽しに小言を言われて引合つたものではないというので不快な顔をするであろう。妻の不快な顔を見ていると良人の方では益々不快になって来る。「終日、勤め先で労苦して、さて慰められようとして帰って来たのにお前はそんな膨れ面をして私を迎えるのか」と言いたくない。或はそれを言葉に出すか、言葉に出さなくともその思いが顔にあらわれる。互の不快が互の心と顔とに相反映して、面白くない家庭の空気はいよいよ益々険悪になって来る。

(新編『生命の真相』第13巻158～159頁)

本当の善き家庭とは

一日の勤勞を終って、外から家庭へ帰って来るとき、或は店を看まもる時間が終って本当にホームというものに吾々が落着くとき、そこは實際吾々にとって、天国でなければならぬのである。そこで吾々が楽しい晚餐に對うとき、吾らの前には、愛する家族たちの楽しい顔が並んでいる。吾らは互に愛情の籠つた微笑をえみ交わしつつ、その日にありしナンセンスを語るであろう。この時、すべての窮屈さはとれてしまい、寛ろぎと、自由さと、愛の言葉と、榮養を与えてくれる食物とが終日の吾々の労苦をなくさめ癒してくれるのである。かくのごとく本当の善き家庭は実に天国であるのである。

(新編『生命の真相』第13巻155～156頁)

神とその神の使いに感謝する

与えられた食物は因縁により、神から与えられたものと信ずるが故に、食事の直接のしつらえ役たる妻に対しては、神の使いとして感謝し、食物そのものは神からの賜り物として感謝するのである。食前に先ず合掌し、食物を与えたまいし神に感謝し、食物を料理し運んでくれた人々を神から来た接待係として感謝し、しばらくその感謝の意を黙然するならば、すべての不平はその場でたちどころに消え失せ、如何なる粗食も天俵の栄養料理に変ってしまうのである。

(新編『生命の真相』第13巻159頁)

愛の心をもって家庭を調和たらしめる

息子や娘を善くしてやりたい愛の心だといって、始終大きな声で口穢く罵ることは失敗である。それはたとい愛の心があっても、鬼の面を被った愛の心である。鬼の面を被っている以上は、愛でも相手を恐れさすばかりに能力がないのである。汝の鬼の面をとれよ。そして本

物の愛の顔を出させよ。相手は懐いて、愛に感じて、喜んで善に遷ってくれるのである。

たえず小言を言い、絶えず怒りを振り撒いて歩き、間断なく人の欠点をさがしつつ、その人を善き人にしてやろうと思うのは、「不調和」から「調和」が生れ出て来るだろうと予想するのと同様な迷信である。たとい、この世の中に瓢箪から駒が生れ出ようとも、「不調和」から「調和」が生れて来ることは難しいのである。諸君がもし諸君の立ち対う人たちをば善ならしめようと欲するならば、自分自身が先ず調和した心持にならなければならぬのである。自分の心が乱れ、癩癩に触って相手を鋭い言葉で刺し貫いているようなことで、相手を善に化し得るなどと偉そうなことを考えぬが好いのである。(中略)

すべてあなたの家庭にてつかわれる言葉をば「神の子」らしい洗練されたものたらしめよ。互を尊べ。何故なら、あなた達は皆な「神の子」であり、「神の子」の生活を成就するために家庭を造っていられるのであるからである。

(新編『生命の真相』第13巻168～171頁)